# 隨想二三

伊賀三郎

△

探偵小説と詩とは文藝上、全く対蹠的のものだと思ふ。犯罪を稱へる詩は信れないがらうし、探偵小説に詩を取入れる事は、ヴェ・ポイントが絶体に反対する。けれども、探偵小説だって、稀には詩を読んで感ずる事がある。詩人だって、こうゆう探偵小説を読む事がある。違ひないと思ふ。探偵小説の開祖

であるポーが、立派な詩人である事も面白いことではないか。

△

年を取った所為か、近頃、変な時に悪い感傷がおこって困る事がある。だれそれさんが亡くなの報の起る時は子供に対した時に限っておるが、年ほど前、故郷で例に行った。私は釣は好きなのだが、子供を連れていずとかごりかいとかいう所が大嫌いで、その為、ずうっと釣を、釣竿を、釣する所を、数ていく好かないのだが、そ

の時はいとめとこつて、こわいと思いやうな
顔をつれのので、自分ではつけられず、長男の
九つになるのに、つけて貰つた。顔をつけて貰
いながら、自分の子供が顔がつけられるやう
になつたかと思ふと、何となく涙ぐましい眼
が熱くなつて涙がにじんで来た。
つい先頃桜果狩りとピクニックの水泳を見に行
つたが、女子水泳で長女ぐらい大きい位の女
の子が競泳をやつた。その子がスタートを見てゐ
る時に、かうゐふ晴れの試合に出すまいとし



た親の心を思ふと、不憫に涙がにじんで来た。
継母と一緒がつたので、胡麻化すのに苦が
折れた。
旧盆で子供を使ふのは、かうゐふ人形を
つれのもらうけれども、旧劇のは誇張が過ぎ
るので、又つて涙なんか出ない。又つて、能
や映画で涙の出る事がある。がつと前に唐船
で涙を出した事があるし、近くは四人の兄弟
父と子しなどで、ついホロりとさせられた。

△

B形 イーグル印創作用紙
10×20

No.

温泉の二階から、緑鮮やかな青葉を眺めながら、筆を執つてゐると、自分の仕事がどこでも出来ると云ふ特徴があつて、安堂寺橋の様な気分のする事がある。

然し、そんな事は一年に一度あるかないつもメチヤクチヤに忙はれて、思ふやうな筆が得られず苦しみ抜く事が多い。さう云ふ時には、苦しまぎれに、つい麻雀をやつたり、映画を見たり、カフエへ行つたりする。それ故、一日は小説家としては一年の半分以上遊んでゐる。

カフエでウイスキーに陶然とする時、麻雀に夢中になつてゐる時、酔ひが、頭の休まつてゐる時なのだ。その他の時間はきつと筆を考へてゐる。おかず外へ出ても、帽子を忘れたり、傳ちたり、失策が多い。これに、一二度食つた位の人の顔や名を忘れて仕方がない。之は記憶力が衰へたとも云ふ。

従来、力が足りなかつたのだ、外国に行つても、家内的に考へて、ゐる事が多いからだと思ふ。

探偵小説家はと

No.

No.

これ長生きは出来ない。コナイ・ドイルが長き生きをしてゐるのは、早く探偵小説を止めて、霊交術の研究をしてゐるからだ。

B形 イーグル印創作用紙

10×20